

身体と心的現象との交差を示す言語装置 —脳内現象のメカニズム解明を人文学的な知へと翻訳する

名古屋大学 大学院文学研究科 教授

中村 靖子



研究の背景

人は自分自身について自己像をもっていますが、それを根拠で支えているのは、自分自身の統一的な身体像です。その身体像がどのように形成され、また随時更新されるかという問題は、観念的ではなく、身体現象として説明しうることであり、そのために、身体の構造やその生理的機能についての知見が必要となります。精神分析を創始したジークムント・フロイト(1856-1939)が最初に出版した単著本は、『失語症の理解にむけて』(1891)という言語障害に関する神経学的研究の成果でした(図1)。この本の中で言語障害の症例を説明する際、重要となったのは、発話のメカニズムについての解剖学的、神経学的知見のみならず、患者本人には意識されない情動の動きに対する洞察でした。この本は長らく埋もれていましたが、現在では、フロイトの精神分析の萌芽を宿した仕事として評価されるようになりました。

研究の成果

フロイトの失語症研究を、精神分析の前駆としてではなく、18世紀の言語起源論争以降の言語思想の流れの中で捉え直したのが、『フロイトという症例』(松籟社、2011年)です。ここでは、人文学的な論考ばかりでなく、神経学者たちの症例研究や解剖学的知見を参照し、両者の融合地点としてフロイトの失語症研究を位置づけました(図2)。とりわけ発話障害に注目したフロイトはやがてヒステリー研究に軸足を移していきますが、ヒステリーは、患者の情動とそれを抑圧する道徳的観念との葛藤が身体症状となって表れるものです(図3)。そうした人間の心の動きと振舞いを、古来より文学は自由に表現してきました。言語起源論争の後、啓蒙主義、ドイツ・ロマン派を経てフロイトの「無意識の発見」、そして「死の欲動」理論に至るまでを、数々の文学作品を取り上げて系譜的に浮かび上がらせたのが、『「妻殺し」の夢を見る夫たち—ドイツ・ロマン派から辿る「死の欲動」の生態学』(松籟社、2013年)です。フロイトは最後の著作モーセ論の中で欲動の断念を、精神化と抽象化を推し進める駆動力として説明しましたが、「断念」された欲動は、同時に「ポエジー

の成立」を促しました。人間の想像力は、文学空間という仮構の世界において、自由なその表現形態を得て、欲動をむしろいっそう触発することにもなったのです。

今後の展望

技術革新は脳内で起こる現象について、より精緻な解明を可能にします。そこから得られた知見は人間の精神構造の捉え方にも影響し、ひいては人間観にも関わってきます。フロイトが神経病理学者であった頃、神経学者たちの論文で駆使される術語は、人文学的な言葉と乖離したものではありませんでした。現代では神経科学の研究が精緻化しているため、その成果を人文学の研究に活かしていくためには、まず人文学的な言葉に翻訳しなくてはなりません。脳内のさまざまなメカニズムの解明を人文学的な知へと橋渡しして、人間の精神や身体の構造に関する総合的な理解へとつなげていきたいと思っています。

関連する科研費

- 平成18-19年度 萌芽研究「言語表象と脳機能から見た環境生成のメカニズム—生きられる空間の複相性をめぐって」
- 平成22年度 研究成果公開促進費(学術図書)『フロイトという症例』
- 平成23-25年度 基盤研究(C)「死の欲動理論の新展開—脳機能画像研究に基づく身体表象と情動理論の接続の試み」

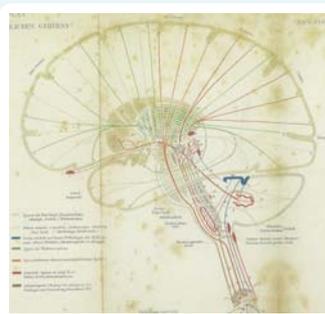


図1 パウル・エーミール・フレクシヒの脳地図(フレクシヒ「ヒト脳の地図」(1883年)より)フロイトが局在論者マイネルトの脳構造の捉え方を否定する際に論拠とした。その際主題となったのは、脳内において自己の身体はいかに表象されるかという問題だった。

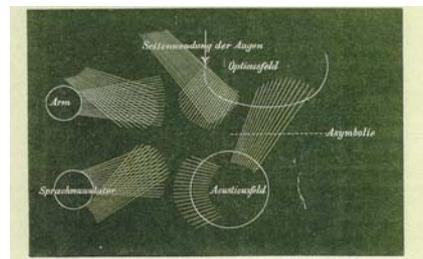


図2 フロイトによる「言語連合野の解剖学的図譜」(フロイト「失語症の理解にむけて」(1891)より)フロイトは、言語の運動中枢の局在を認めたが、言語の感覚中枢の局在は否定了。そもそも心的現象を局在することはできないと声明したフロイトは、この書の終盤では、J・S・ミルの「論理学大系」を参照している。

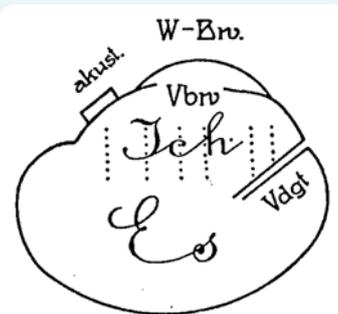


図3 自我と無意識とエスとの関係図(フロイト「自我とエス」(1923)より)脳解剖学に精通していたフロイトが提示する心的装置のモデルは、脳のイメージ図に似ていると指摘されている。